人名と用語

本文中であまり解説されていない人名と用語を補足説明します。

◉内 藤 源 助

文化5年(1808)、蝦夷地の幕府直轄統治に伴う北方警備のため、津軽藩と交代して宗谷詰となった会津藩家老。藩兵622名を率いて宗谷に上陸したが、宗谷は警備する地形としては狭く、大勢が駆け引きするためには不可能なところであったため、警備人員の内から、番頭梶原平馬は252名を率いて利尻に詰め、宗谷には軍将家老内藤源助以下370名が駐屯した。

〈会津出発〉

利尻詰番頭隊　　文化5年1月10日(新暦:文化5年2月6日)

宗谷詰軍将家老隊　　文化5年1月12日(新暦:文化5年2月8日)

〈警固地到着〉

利尻詰　　閏6月1日(新暦7月23日)

宗谷詰　　5月8日(新暦6月1日)

〈警固終えて任地を出発〉

利尻詰　　文化5年7月25・27・8月3日(新暦:9月15・17・22日)

宗谷詰　　8月22日(新暦10月11日)

〈会津到着〉

利尻梶原隊　会津城下到着　8月23日

利尻三宅隊　出雲崎より上陸、陸路会津へ　9月2日

宗谷内藤隊　会津城下へ戻る　11月28日

稚内には内藤源助愛刀の鍔が残され、稚内市の文化財に指定されているが、どのような理由で残されたか詳細は不明。

◉平 沢 勝次郎

蝦夷地の幕府再直轄に伴い北方警備のため、幕吏、調役下役元締梨本弥五郎と共に初めて妻子を伴って宗谷に赴任した弥五郎の部下、足軽。安政3年3月17日ソウヤ詰を命じられ、25日函館出立。安政4年当時ソウヤ詰。

勝次郎の妻は安政5年3月で亡くなり、護国寺過去帳に38歳とあり、墓は旧藩士の墓にある。

◉松 浦 武四郎

文化15年(1818年)生まれ。どんなところかよくわかっていなかった蝦夷地に行くことを決意し弘化2年(1844年)初めての蝦夷地探索で知床岬まで行き、ここに「勢州一志郡雲津　松浦武四郎」と書いた標柱を建てて箱館に戻る。弘化3年再び蝦夷地を訪れる。

3度の蝦夷地探索の記録を「初航・再航・三航蝦夷日誌」にまとめる。

安政2年(1855年)武四郎37歳、箱館(函館)奉行所の支配勤方を命じられた。

安政6年(1859年)幕府の役人を辞任するまでの4年間に3度、蝦夷に行き、「近世蝦夷人物誌」、蝦夷地調査の成果としての地図「東西蝦夷山川地理取調図」を作成。「取調図」には、凡例や道案内など

で世話になったアイヌ人の名前が記され、内陸部の地形を丹念に調査し、何百本もの川筋の一本一本、膨大な数のアイヌ語地名を収めています。

江戸時代が明治へ変わると、明治政府は数々の業績を持ち、蝦夷地通と誰もが認める武四郎を「開拓判官」に任命している。

北海道の地名や郡名にアイヌ語を生かした名前をつけていき、武四郎が「北海道の名付け親」と言われる理由はここにあります。(松阪市　松浦武四郎　参照)

松浦武四郎

松浦武四郎の宗谷に関係する旅は

・1846(弘化3)樺太探険　『再航蝦夷日誌』

4月松前出発～9月江差到着

5月宗谷(5月10日石狩川北上、5月25日樺太行き、7月16日樺太より帰る)

・1856(安政3)東北西蝦夷地一周　『竹四郎廻浦日誌』

5月18日　バッカイ泊　土人　3軒　人別18人　男9人・女9人

5月22日　樺太渡り、8月6日宗谷着、16日宗谷発北海岸通り

・1858(安政5)東西蝦夷山川地理取調御用　『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌・(古以登以誌7月15・16日・北岬誌7月17日)』、『東西蝦夷山川地理取調図』

◉間 宮 鉄次郎

幕吏。間宮林蔵の養子、名は孝順。

安政元年(1854)普請役、函館奉行堀利熙・村垣与三郎に従い蝦夷地に出張、樺太に渡って東岸を巡察した。同年函館奉行支配調役下役となり、安政3年調役並、万延元年(1860)調役に昇進。

◉村 山 伝兵衛

初代伝兵衛は能登(石川県)出身。松前に移って運送業を営み、阿部屋を号し、宝永年(1706年～)には宗谷、留萌場所の請負人となり、アイヌに魚網の製法や海鼠引具の使用法などを教えた。1757年(宝暦7)75歳で松前に没す。

3代伝兵衛(幼名市太郎)は着々と事業を拡張、1790年には藩命により樺太に漁場を開く。盛時の請負場所および差配場所は数十カ所に上り、松前の倉庫数十棟、船舶数十隻を擁し、全国長者鑑に名を連ねた。しかし競争商人のねたみを受けて、1796年(寛政8)財産を没収されて失脚した。

村山家は近江商人とは別派の在所商人として頭角を現した人物であった。村山家は後に場所請負人として復活し、幕末まで続いたが、昔の盛大さを取り戻すことは出来なかった。一族の墓は松前の光善寺の一隅に静かに立ち並んでいる。

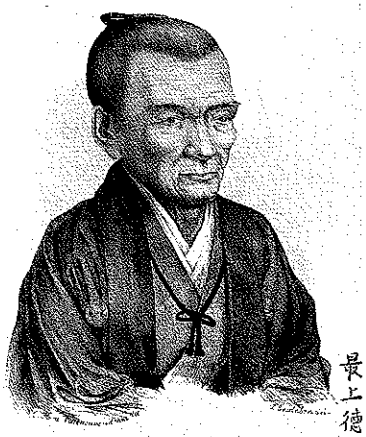
◉最 上 徳 内 (宝暦5～天保7、1755～1836)

1781年26歳、江戸へ出た元吉は名を徳内(とくない)と改め、幕府の医管山田宗俊について医学、算術を、1784年(天明4)本多利明に入門し天文・航海・測量術を学ぶ。

1785年、86年(天明5年、6年)幕府から蝦夷地調査に派遣された普請役の従者として一行に加わ

り，択捉・得撫島を探検した。

1798年(寛政10)幕臣近藤重蔵らと千島を探検し、エトロフ島に大日本恵登呂府という標識をたてた。また東蝦夷地が幕府直轄領となると箱館奉行支配調役となった。その間1791年(寛政3)の南千島、翌年の樺太など1808年(文化5)まで9回にわたって蝦夷地・千島・樺太を探検した。



MOGAMI TOKNAI.
最上徳内

当時随一の蝦夷通であり、1792年(寛政4)には世界で最初の蝦夷語にかんする『蝦夷方言藻汐草』を刊行したほか、アイヌの生活・風習について『渡島筆記』を著した。1826年(文政9)、シーボルトに蝦夷の地図や植物標本の貸与・寄贈，アイヌ語の援助をし、やがてドイツ人医師シーボルトによってその知識は世界にひろめられた。

シーボルトは、その著書「日本」に徳内が作成した北方地図を掲載し「18世紀における最も傑出した日本の探検家」として最大級の言葉でほめたたえている。1836年、江戸で死去。82歳であった。

◉秋田藩陣屋

安政元年(1854)、日米和親条約により函館が開港され、翌年には蝦夷地再直轄が実施された。ロシアとの間には樺太における国境問題があり、警備体制の強化が必要とされていた。

直轄にともなう警備は、函館奉行の下に奥羽諸藩の兵力が配され、宗谷は秋田藩の持ち場となった。その範囲は日本海側増毛から利尻・礼文・宗谷をまわってオホーツク海の紋別境まで、当時北蝦夷地といわれた樺太を含む広大な地積を割り当てられていた。元陣屋を増毛に、出張陣屋を宗谷・北蝦夷地の白主・久春古丹に設けた。樺太は守備兵を3月～ 8月まで置き、冬は増毛に引揚げた、宗谷には夏期守備兵を置いたと記録されている。

この警備体制には最低20ケ所の陣屋と三千の兵が必要とされたが、藩力がなく幕府に非常の場合のみの警備・兵力常駐を上書請願したが認められなかったと云う。

安政3年に宗谷を訪れた玉虫左太夫の『入北記』には「又前道へ戻リ右折ノ山麓谷際ニ佐竹公ノ陣屋アリ。家数二棟、人数百人余モ来リ居ルト云ウ」と記録されている。また、宗谷孟仙里図、北海道歴検図や市指定の宗谷絵図などの絵画資料の中に秋田藩陣屋が見られる。

秋田藩陣屋跡

実際に宗谷警備についた藩士の見た『宗谷詰合日記』万延元年九月十八日の項には「小雨。異国船見え、五里ほど沖、北の方より参り、西の方へ参り候。じきに見えず」とあり、緊張した警備の様子が伝えられている。(入北記　他)

◉旧藩士の墓

江戸幕府が蝦夷地全島の直轄を開始した文化4年(1807)以来、宗谷地方は藩兵の越冬警備が本格的に行なわれるようになった。

文化4年に津軽藩士230人が越冬警備の任についたが、十分な越冬準備と対策がとられぬまま迎

えた冬は、東北の冬とはまったく違う想像を絶する厳しい寒さのため32人(山崎半蔵日誌の中で確認できる数)の犠牲者を出している。会津藩は宗谷・利尻・樺太で50余人が水腫病で死亡したと記録されている。このように犠牲が大きなことから、幕府は津軽藩に翌文化6年より増毛まで南下して越冬することを認めている。

旧藩士の墓

墓は現在13基あり、会津藩3基・安政2年以降の秋田藩2基・幕府関係者8基(大塚良輔の子2名を含む)である。

幕領時代、宗谷には一定の墓地がなく関係者が都合のよい場所を選んで埋葬していた。そのため、海岸や畑、道端に墓碑が点在していた。しかし、まつる人がいなくなり荒れるままになると、心ない漁民の中には墓石を漁場の釜石に使うものさえあったという。

このような状況を嘆いた村人一同が墓を護国寺の隣地に集めて祀ったのが明治5年のことである。その後、昭和3年に護国寺跡の背面山上、さらに昭和32年に現在地(宗谷歴史公園)に移されている。(稚内市史　稚内の文化財)

◉サンナイ場所

〔近世〕江戸期の場所名。西蝦夷地のうち、北は宗谷海峡、東はオホーツク海。万延元年ソウヤ場所の一部が分離して成立。区域は西がソウヤ場所境のヲンコロマナイ、東南はソウヤ場所境のチライヤスベツ。リイシリ(利尻)・レプンシリ(礼文)・樺太(北蝦夷地)などへの交通の要路であるため幕府領とされた。場所請負人は藤野喜兵衛、運上金は50両、ほかに別段上納28両3分永9文2分、万延元年のアイヌ人口92人。(北海道地名大辞典)

◉ソウヤ場所

江戸期の場所名、西蝦夷地の最北部。場所の設定は貞享年間といわれるが「津軽一統志」によると寛文9年にはすでに松前の商船が交易のためにソウヤに来ている。

日本海岸テシホ場所との境はエキコマナイ。オホーツク海岸は古くは知床半島にまで達する広大な地域で、寛政2年シヤリ場所が分離独立し、その境界がノトロとなる。その後、モンベツ場所が分離し、安政2年の幕府領移行の際にリイシリ場所がソウヤ場所に統轄された。万延元年サンナイ場所が設定され幕府領となった。

はじめ松前藩領、文化4年幕府領、文政4年再び松前藩領、安政2年からは再び幕府領(出羽国秋田藩警衛地)。

藩の勤番所と運上屋はソウヤに置かれ、場所内の産物は鯨・鮭・鱒・鱈・昆布・鮑・海鼠・熊皮・熊胆・アツシなど。ソウヤはオホーツク沿岸および樺太アイヌとの交易場として重要な役割をはたし、山丹交易によって大陸産の錦・玉類もこの地にもたらされていた。

文化2年ロシアの使節レザノフがノシヤップ(野寒布)に上陸、ついで同4年ロシア船がノシヤツプ沖で松前藩船を襲う事件があり、ソウヤは北方警備の拠点となる。同4～5年場所警備のため派遣された津軽・会津両藩士中に水腫病死者が多数出る。

場所支配人は寛政4年長三郎、文化4年藤右衛門、支政7年嘉吉、安政4年八右衛門。

アイヌの首長(大将・総乙名)は寛文9年シルヘタイン・カカモレイ、寛政4年レイテイレ、文化4年ヲタトモンクル、安政4年センケ。

場所内のアイヌの戸口は文化4年509軒・2,186人、文政5年149軒・719人、安政元年101軒・377人、明治2年24戸・100人と減少の一途をたどる。

運上屋の番人・稼方は寛政4年12人、文化4年21人。安政元年場所内家作は運上屋・勤番所・通行屋各1、蔵76、船292艘、馬89疋、台場1か所。明治2年北見国枝幸・宗谷・利尻・礼文4郡のうちとなる。(北海道地名大辞典)

◉幕府直轄時代

松前藩に任せていた蝦夷地の管理を江戸幕府が直接担当した時代。前後二つの時期がある。

【第1次幕府直轄時代】1799～1820年(寛政11～文政3)

場所請負人の過酷な経営に対するアイヌの蜂起(国後・目梨)、またロシア人南下の気配もあって幕府直轄が実行された。「夷人撫育」の充実でアイヌがロシア人に通ずるのを抑え、また兵力も配して辺境の防備を固めるという事業は、幕府の手によらなければ、実効があがらないと思われたのである。また蝦夷地開発の経済的効用もふくめて考えられていたようで択捉(エトロフ)の魚肥供給は新田15万石に当たるほどだとか、蝦夷地への米穀供給は荒廃しつつある奥羽地方の農村回復に有効であろうというような考えも示されていた。最初に直轄した東蝦夷地では、場所請負人を廃し、直捌(サバキ、交易の幕府直営)を行い、鉄銭を流通させ、対アイヌ交易の条件を改良した。南千島には、南部、津軽藩の兵を、のち西蝦夷地を直轄すると、1807年(文化4)宗谷方面に津軽藩の兵を配した(文化5年は会津藩)。直捌の収益は蝦夷地経営費について自賄(ジマカナイ)の見通しを持たせるほどであったが、道路開削、開墾計画、防備体制の規模拡大などで幕府の財政負担は大きかった。ゴローニン事件の解決などを通じて対ロシア防備の意識も緩和に向かい、松前藩の復領運動も行われ、幕府直轄は終わることになる。アイヌ、ロシア人の動きに刺激され、北辺の防備、開発の基礎を見定め、蝦夷地全域に対する幕藩制政治の関わりを明確にした時代であった。

【第2次幕府直轄時代】1855～1868年(安政2～明治元)

日米和親条約で函館が開港場とされると、1854年(安政元)箱館周辺が幕府直轄とされ、翌年蝦夷地再直轄が実施された。

ロシアとの間に千島、樺太における国境問題の検討が始まり、防備体制も調査されるなかで再直轄が必要とされたのである。ただし今回は、福山、江差周辺(知内～五厘沢)は松前藩領として残された。樺太を重点とした防備体制に奥羽諸藩の兵を動員し、のちには、南部、津軽、秋田、庄内、会津、仙台の6藩に蝦夷地の一部を藩領として与え、防備を充実させることとした。定住人口の増大も重視され、開墾計画が進められ御手作場(オテサクバ)の開設などが行われている。場所請負制はそのままとされたが、アイヌとの交易やその使役は幕吏の監督下におくものとされ、種痘の実施などアイヌに対する保護策も目立ったが、日本風への帰俗、同化を強制する政策がとられ問題も起こしている。産物会所による流通統制、また場所請負人らへの金融によって経済的利益をあげる政策も実行された。鉱山開発も種々試みられ、茅沼炭山が目立っている。諸術調所の開設のほか、造船、測量、築城などで西洋式の技術がとりいれられた。開国、自由貿易が強制される世界情勢の

なかで警衛、開墾、アイヌ同化などを新しい技術もとりいれながら推し進め、本格的な幕藩制下の領土化する方針がとられた時代であった。(北海道大百科辞典)

◉松　前　藩

北海道の松前を本拠に蝦夷地を領有した外様の小藩。藩主は松前氏。松前藩の最大の特徴は、その大名知行権が石高に裏づけられた領国の支配権ではなく、形式上は、あくまでも蝦夷地交易の独占権であった。このことが、松前藩の再生産構造はじめ、家臣の知行形態、財政構造、対アイヌ民族政策、村落支配のあり方など藩政の諸側面に決定的な影響を与えたが、中でも蝦夷地と和人地の区分、商場知行制、和人地三湊(松前・江差・箱館)での出入商船・人物に対する沖口番所支配体制の強化が、大名知行権の内容を合理的に実現するための大きな柱となった。また、藩財政も当初はアイヌ交易はじめ鷹、砂金などの特産物収益が大きな比重を占めたが、場所請負制成立後は、請負人の運上金や沖口諸役口銭の収益が主軸を占めるようになった。さらに松前氏は無高になったため、その家格も石高表示がむずかしく、1719年(享保4)になってようやく一万石格となった。その後幕府は、北辺防備問題から1799年(寛政11)東蝦夷地を仮直轄し、続いて1802年(享和2)永久直轄、1807年(文化4)には、蝦夷地全域を直轄するに及んで、松前氏は陸奥国伊達郡梁川に移封された(梁川他常陸国信太郡・鹿島郡・上野国甘楽郡・群馬郡内に九千石、内実一万八千六百石)。その後1821年(文政4)幕府は直轄をやめて旧領地に復領されたが・復領後は商場知行制を廃止し、家臣への俸禄形態も形式上石高で表示した凝制的な蔵米知行形式をとった。また1831年(天保2)再び一万石格となり、1849年(嘉永2)幕府から築城を命ぜられ、1854年(安政元)落成、福山城と称し、これにより初めて城持ち大名となった。しかし、翌1855年(安政2)箱館開港に伴い西部乙部以北、東部木古内以北の旧領地の大部分が再び幕府の直轄するところとなり、替地として陸奥国伊達郡梁川・出羽国村山郡東根に計三万石、出羽国尾花沢一万石を預地(アズカリチ)とされ、かつ毎年金18,000両を給された、これにより、松前氏は初めて石高と直結した三万石の域持ち大名となったが、1868～1869年(明治元～2)の箱館戦争で大きな打撃を受けたうえ、1869年6月には館藩と改称し、廃藩置県に至った。(北海道大百科辞典)